

【No17】【4】

🔍 全体のテーマ

この一節は、「歴史意識」の変遷を扱っている。ごく最近まで、人類は「自分に歴史がある」という認識すら持っていなかったという視点から始まり、過去の人々が時間の流れをどのように捉えていたかが描かれている。特に、季節の循環という自然現象を通して、時間の繰り返し性を強く実感していたことが指摘されている。

🔍 全訳

人類の歴史のほんのわずかな一片のあいだにしか、人間は「自分に歴史がある」ことに気づいてすらいなかった。人類が文字を発達させ、文明が始まって以来のほとんどの年月のあいだ、人は今日の私たちとはまったく異なる仕方で、自分自身や自分の共同体について考えていた。人は時間の経過を、一回限りで不可逆的な変化の連続としてではなく、むしろ見慣れた出来事が繰り返されるものとして捉える傾向があった。春、夏、秋、冬、そして再び春へと続く季節の循環は、彼にとって時間の経過を示す最も鮮明で、最も親密な兆候だった。

🔍 第1文

For only a tiny fragment of human history has man been aware even that he had a history.

人間は、自分に歴史があるとすら気づいたことが、人類史のごくわずかな一片にすぎない。

■ 解説ポイント:

✅ 否定語句の倒置構文: For only a tiny fragment of human history のように否定的な副詞句が文頭に来ると、倒置(助動詞・be 動詞+主語+動詞)が起こる。→ 通常語順: Man has been aware even that he had a history for only a tiny fragment of human history.

✅ fragment: 名詞。「断片、小部分」・語源: frag-(壊す) + -ment(名詞語尾) → break (壊す)に由来。同意語: piece, scrap, shard

🔍 第2文

During nearly all the years since man first developed writing and civilization began, he thought of himself and of his community in ways quite different from those familiar to us today.

人類が文字を発達させ、文明が始まって以来のほとんどの年月のあいだ、人は今日の私たちにとってなじみ深いものとはまったく異なる方法で、自分自身や自分の共同体について考えていた。

■ 解説ポイント:

- ✔ ways quite different from those familiar to us today:関係詞などを用いない形容詞句による修飾。different 以下が ways を後置修飾。
- ✔ those familiar to us today:those は直前の名詞 ways の繰り返しを避けた代名詞。
・ familiar to us today は those を後ろから修飾する形容詞句。
・ このような形は、that, those が直前の名詞を受けて、その修飾を引き継ぐ構造。
- ✔ カンマの使い方:During ~ began ままで長い導入句のため、主節 he thought の前にカンマを置いている。

🔍 第3文

He tended to see the passage of time, not as a series of unique, irreversible moments of change, but rather as a continuous repetition of familiar moments.
人は、時間の経過を、一回限りで不可逆的な変化の連続としてではなく、むしろ見慣れた瞬間の繰り返しとして捉える傾向があった。

■ 解説ポイント:

- ✔ see A as B:「A を B と見なす」同意表現:regard A as B / think of A as B / view A as B / look on A as B
- ✔ not A but B 構文の応用:not as A but as B の形で「AではなくBとして」
- ✔ continuous と continual の違い: continuous = 「途切れなく連続した」(例: continuous line) continual = 「繰り返し起こるが間に中断あり」(例: continual complaints)
- ✔ irreversible:「元に戻せない」語源:ir(否定)+re(再び)+vers(回す)+ible(可能な)→「再び戻すことができない」
- ✔ カンマの使い方:not as ~, but rather as ~ の構造において、対比の両要素を明確に区切るためにカンマが使われている。また、unique と irreversible の間にも修飾語の列挙を示すカンマがある。

🔍 第4文

The cycle of the seasons - spring, summer, fall, winter, spring - was for him the most vivid, most intimate sign of passing time.
春、夏、秋、冬、そしてまた春へと巡る季節の循環は、彼にとって時間の経過を示す最も鮮明で、最も親密な兆候だった。

■ 解説ポイント:

- ✔ for him:挿入句(挿入句構文)として、主語(The cycle of the seasons)と動詞(was)の間に置かれており、「彼にとって」という視点を加えている。
 - ✔ vivid:「鮮明な、生き生きとした」 vivid の後のカンマは、形容詞 most vivid, most intimate を列挙しており、等位関係を示している。
 - ✔ intimate:「親密な、個人的な」 語源:in(中へ)+tim(=timere「恐れる」→接触を意味)+-ate →「心の中に深く入り込んだ」→親しい
 - ✔ passing time:「時間の経過」 同意語:the passage of time / the flow of time
-

[重要]修飾語の列挙

✔ 例文 1

She was wearing a soft, oversized wool sweater that smelled faintly of pine and smoke.

(彼女は、柔らかくて大きめのウールのセーターを着ていて、それはかすかに松と煙の香りがした。)

🔍 文法解説:

● a soft, oversized wool sweater

- この名詞句には 3 語の修飾語がついており、語順に意味の階層があります。
 - ① soft(形容詞):素材の質感「柔らかい」
 - ② oversized(形容詞):サイズの大きさ「大きめの」
 - ③ wool(名詞的形容詞):素材「ウールの」
- これらが名詞 sweater を順に修飾しています。

✔ 例文 2

They camped beside a wide, fast-flowing mountain river that cut through the valley.

(彼らは、谷間を切り裂く広くて流れの速い山の川のそばにキャンプした。)

🔍 文法解説:

● a wide, fast-flowing mountain river

- 形容詞が 2 語(wide, fast-flowing)あり、カンマで区切って並列されています。
- wide は「川幅が広い」
- fast-flowing は「速く流れる」という現在分詞の形容詞用法
- 最後の名詞 mountain river(山の川)を修飾しています。
- 「川」が対象なので、形容詞の順序は「大きさ → 状態」の自然な英語の形容詞配列に従っています。

✔ 例文 3

She spoke with a calm, very measured voice that made everyone stop and listen.

(彼女は、みなを立ち止まらせて聞き入らせる、落ち着いていて非常に抑制のきいた声で話した。)

🔍 文法解説:

● a calm, very measured voice

- ここでは形容詞 2 語 (calm, measured) に加え、2 語目 measured を副詞 very が強調しています。
- calm: 落ち着いた(話し方の性質)
- measured: 抑制された、慎重にコントロールされた(人の調子・話し方などに使われる)
- つまり、「ただ calm(落ち着いた)」だけでなく、「とても measured(きちんとした調子の)」という二段階の描写。

✅ 例文 4

He looked at me with a sharp, not always kind expression that reminded me of my father.

(彼は、父を思い出させるような、鋭くて、必ずしも優しいとは言えない表情で私を見た。)

🔍 文法解説:

● a sharp, not always kind expression

- 形容詞のカンマ区切り列挙 (sharp, kind) に、副詞句 not always を挿入することで二語の意味の関係にズレや曖昧さを加える効果が生まれています。
- sharp: 「鋭い」= 視線や表情の強さ
- not always kind: 「いつも優しいとは限らない」= 否定のニュアンス(部分否定)

✔【エッセイ 1:The Hidden Landscape】(冠詞 形容詞, (M) 形容詞 名詞)

Under certain conditions, a plain, sometimes beautiful landscape can feel more moving than any painting. We expect beauty to stand out, bright and unmistakable. But sometimes, under quiet skies or fading light, even a dull field breathes with quiet depth. The eye must learn not just to see, but to notice.

- ・plain landscape:地味な風景 ・fading light:薄れゆく光
- ・breathe with ~:~を感じさせる、に満ちている

地味で、ときに美しさを見せる風景は、ある条件のもとでは、どんな名画よりも深く心を打つことがある。私たちは、目立つものに美を求めがちだが、静かな空の下、くすんだ野原が深い気配をまとっていることもある。大切なのは「見る」ことではなく、「気づく」ことなのだ。

[文法解説]

- ・ a plain, sometimes beautiful landscape:形容詞(plain, beautiful) + 名詞(landscape)の並列構造の間に、副詞句 sometimes を挿入。2語目の形容詞だけを修飾し、「常にではないが、美しく見えることもある」ニュアンスを追加。
- ・ Under certain conditions:文全体を修飾する条件を表す前置詞句。文頭配置により意味を焦点化。
- ・ can feel more moving than ~:感覚動詞 feel を使い、「~より感動的に感じられる」という比較構文。

✔【エッセイ 2:The Misread Glance】(冠詞 形容詞, (M) 形容詞 名詞)

In the right light, a cold, not quite hostile stare can seem almost affectionate. Tone is a matter of perception. A sharp look may wound at noon, yet soothe at dusk. What changes is not always the glance, but the light—and the heart behind the eyes.

- ・hostile stare:敵意ある視線 ・affectionate:愛情のこもった・soothe:和らげる

光の加減によっては、冷たく、だが完全に敵意があるとは言えない視線が、むしろ優しく感じられることがある。視線そのものではなく、それを受けとめる光、そして目の奥にある心が、印象を変えるのかもしれない。

[文法解説]

- ・ a cold, not quite hostile stare:形容詞(cold, hostile)の間に副詞句 not quite を挿入。完全否定せず「敵意があるわけではない」というニュアンスの調整がなされている。
- ・ In the right light:前置詞句で、「光の条件下で」という状況を表す修飾語句。文全体に比喩的含意も持たせる。

・ can seem almost affectionate:助動詞 can+感覚動詞 seem により「～のように感じられる」。almost により「完全にではなく、ほぼそう見える」ニュアンスを補う。

✓【エッセイ 3:The Sharp Reply】(冠詞 形容詞, (M) 形容詞 名詞)

She answered with a quick, not always polite remark that surprised everyone in a predictable way. She didn't aim to shock, but clarity often offends. Her words were sharp, not cruel; fast, not careless. Truth, after all, is rarely soft—but sometimes exactly what's needed.

・predictable:予想された、ありきたりな・clarity:明確さ ・offend:不快にさせる

彼女は、素早く、必ずしも丁寧とは言えない返答をした。それは、驚くべきというより、予想通りの形で周囲をざわつかせた。だが彼女は、驚かせようとしたのではない。ただ、正直であろうとしただけだ。

[文法解説]

- ・ a quick, not always polite remark:形容詞の列挙(quick, polite)の間に副詞句 not always を挿入し、「常にはないが丁寧なこともある」という限定的否定を表す。
- ・ with a remark:動詞 answered にかかる様態の前置詞句。どのように答えたかを表す。
- ・ in a predictable way:that surprised everyone に続き、「どのように驚かせたか」を説明する副詞句。

✓【エッセイ 4:The Absurd Rule】(冠詞 形容詞, (M) 形容詞 名詞)

They followed a strange, in fact slightly absurd, rule that no one fully understood. Rules need not make sense to be followed. Sometimes it's not logic but repetition that sustains them. Absurdity, once dressed in tradition, becomes invisible—and harder to question.

・sustain:持続させる、支える ・once SV:いったん～すると ・invisible:目に見えない

彼らは、奇妙で、実のところ少しばかげた規則に従っていた。理解されていないにもかかわらず、それは繰り返されることで正当化され、疑われることすらないのだ。

[文法解説]

- ・ a strange, in fact slightly absurd, rule:形容詞 strange と absurd のあいだに挿入句 in fact slightly を入れ、後者の意味を補足・強調。
- ・ rule that no one fully understood:関係詞節で先行詞 rule を修飾。that は目的格 (understood rule)の関係代名詞。
- ・ in fact:挿入副詞句で、「実際には」「実のところ」という意味の補足を加える語調効果。

